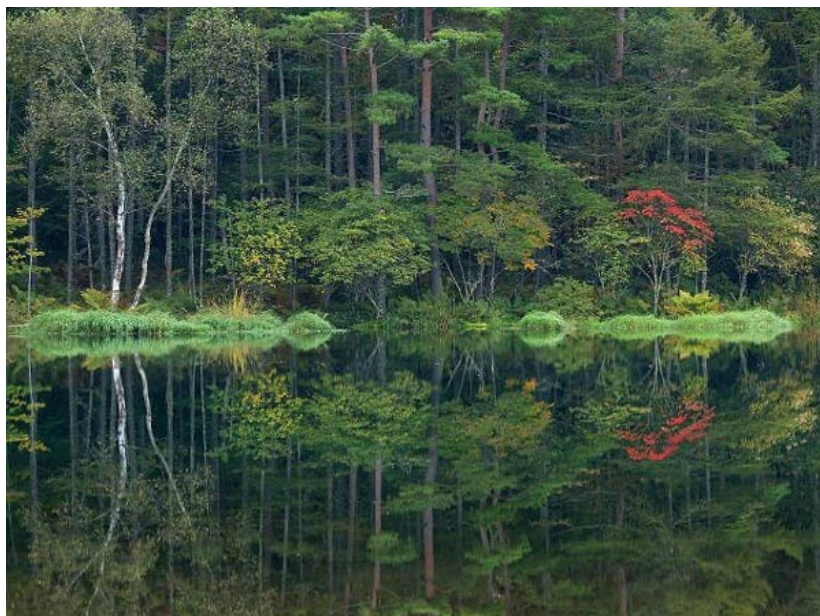


短編 3



story by aono photo by mimusan



高原の夏はそろそろ終わりに近づいている。人の訪れることの少ないこの湖を静寂が支配し、風さえも遠慮がちに吹いていた。

水森曜子は湖畔にしゃがんで、透明な水に手を入れた。冷たさが心地よい。いつまでもこうしていたい、そうもいかない。幼い二人の子が待っているのだ。妹の園子が「たまに息抜きをしてきたら」と言ってくれた好意に甘えて、ひとりでこの湖まで散歩に来た。

気に入りのこの湖から十分活力を貰った。そろそろ帰らないと、と立ち上がった途端、ふっとめまいがして水の中にうつ伏せに倒れた。

起き上がらなければ、とあせる気持ちと裏腹に、頭と首が動かない。何が起こったのかわからないまま、曜子は手足をばたばたさせた。誰かが馬乗りになってる。その手が自分の頭を抑えている。

抗なうようにあらん限りの力で首を持ち上げようとした。水面から微かに顔が出たその瞬間、薄笑いを浮かべて曜子の顔を覗いている顔が目の隅に映った。

曜子は混乱した。

「何故？」と思うまもなく、又頭を抑えられた。水が鼻や口から曜子の体に侵入し、まもなく呼吸ができなくなった。

* * * *

軋むような音を立てて列車が停まった。水森亮は、駅舎の外にある駐車場から構内の改札口へと向かった。従妹の早乙女晶（あきら）が乗っているはずの列車だ。

信州にあるこの小さな駅は、プラットフォームは一つだけ。線路脇の道路からも列車の発着が見える。

「亮ちゃん」

左手に大きな花束を抱え、右手に真っ赤なキャリーバッグを引いている、薄いブルーのTシャツに白いジーンズの少女が目に入った。改札を通りながら手を振っている。亮はその姿を見るといつも軽いめまいを覚える。歳月を飛び越えて、死んだ妹が蘇ったように思える。晶は今年十四歳。年の割には華奢で小柄だが、当時三歳だった晶も、美緒が死んだ年齢になった。

キャリーバッグを預かり、車へと向かう。外は夏の日差しが眩しい。

「涼しいかと思ったら、結構暑いじゃん」晶が不満げに言う。

「ここはまだ麓だからだよ。別荘のあるところまで上がれば涼しくなるさ」

晶は花束をシルバーのベンツの後部座席に置き、助手席に滑り込むと歓声を上げた。

「高級だねー。うちのとは大違い」

「オヤジの車だから」そっけなく言うと、亮は車を発進させた。

「この前ここに来たのは、あたしが三才の時の夏らしいけど、全然覚えてないんだ」

「十年以上前になるかな。僕はまだ高校生で、晶はあかん坊だった」

「三歳だよ、あかん坊じゃないもん」晶はぷっと頬を膨らませた。が、すぐに神妙な顔になる。

「その花束はおふくろと美緒のため？ 先に湖に寄る？」

「うん。亡くなった場所に置いて欲しいって、ママから頼まれたから」

「おふくろが死んで去年で二十三回忌。早いもんだな。生きていれば五十三歳だ」

「うわあー、曜子おばさまが五十三歳なんて、想像できない」

「写真は年をとらないから」亮は微かに笑った。

湖への道を登っていくにつれ、空気は冷たくなり、開けた窓から心地よい風が晶のショートのをそよがす。時折聞こえる鳥のさえずりが耳に優しい。

「あの鳥はなんていうの？」

「多分、オオルリだ。良い声だろう？ きれいなブルーの鳥だよ」

説明しながら、亮は晶の横顔をちらっと見た。美緒にますます似てきたと思う。時に従妹は姉妹より似ることがあるという。

美緒はオオルリが好きだった。オオルリばかりでなく、鳥が好きだった。バードフィーダーを庭のあちらこちらに置いて、鳥が餌をついばむのを見ては喜んでた。

頭から妹の面影を振り払うと、亮はアクセルを踏んだ。

「比呂美さんがお昼を用意してくれているはずだから少し急ぐよ。湖に寄っていると十二時を回りそうだ」

「亮ちゃん、まだ比呂美さんて呼んでるんだ」

「前からそう呼んでたから。親父と結婚したからって、今更変えられないよ」

「ふーん。そんなものなんだ」

「でもさ、比呂美おばさまはとても優しいじゃない？ あたしもあんなお母さんが欲しいな。うちのママはこわすぎるよ」

「美緒にとっても比呂美さんはとても優しい母親だった。たった一年間一緒に過ごただけだったけど。継母ってことで遠慮してたのかもしれないね」



亮の母が死んだとき、比呂美は近所の別荘に良く来ていた女子大生だったとおぼろげに覚えている。

一度結婚したと聞いたが、すぐに離婚。それからは別荘に一年中住むようになった。亮の父はすぐに比呂美の虜になり、頻繁に比呂美と会うようになった。当時中学生だった亮にとっても、比呂美は眩しい存在だった。すぐに比呂美の家にも出入りするようになったが、祖父の別荘と比べるとかなり小さく思えた。

「何故離婚したの？」と亮は無邪気に聞いたことがある。

「結婚って、思う通りにはならないものよ」

「じゃあ、もう結婚しないの？」

その言葉に、比呂美はふふっと笑った。それが亮に強烈な印象として残っている。

道路わきに車を止めた亮は、後部座席から花束を取り出した。湖はいつものように静かな佇まいを見せ、人影もない。透き通った湖面は、対岸の木々の姿をくっきりと映している。変わったことと言えば、展望台のような東屋ができたくらいだ。管轄する県が観光スポットにしようと目論んでいるらしい。亮には湖に突き刺さった大きな棘のように思える。

「この湖にはいつも誰もいないみたい。とっても綺麗な湖なのに」晶は不思議そうな顔をした。

「道路からは見えないから、車で通りかかると気がつかないんだろう。歩いて通る人は殆どいないし」

晶は花束を受け取ると、湖畔にそっと置き、両手を合わせた。黙禱が終わると、亮は複雑な思いで湖を眺めた。母と妹の命を奪った湖。こんなに静かで美しいのに。



跪いて手を湖水の中に浸していた晶が亮を振り返った。

「亮ちゃん……」

「なに？」

「……亮ちゃん、こわい顔してる」

「そうか？ いつもこんな顔さ。じゃ、そろそろ行こうか」亮には、晶が別の事を言いたかったのではないかと思えた。

別荘への道すがら、寡黙になった晶はずっと窓の外を眺めていた。

亮は車を別荘の敷地内へ入れてエンジンを止めた。車から降りると、飼い犬のブラッキーが迎えに飛び出してきた。

「うわー、真っ黒でおっきい！」晶は車から降りるのを躊躇しているようだ。

「大丈夫だよ、こいつは大人しいし、舐もできている」亮はブラッキーの頭を軽く撫でた。

「ほんと？ 噛み付かない？」晶は恐る恐るドアを開けた。ブラッキーは亮の傍に座ったまま動かない。

その時、比呂美が玄関から顔を出した。ブラッキーを見て、顔をしかめる。

「お帰りなさい、亮さん」

形よいバストを際立たせているラベンダー色のぴったりしたTシャツを着ていると、比呂美は父の創と結婚したときから歳をとっていないように見える。当時、比呂美は三十歳、亮は十五歳だった。女性としては大柄な方であるが、若々しい比呂美との年齢差が年々縮まっているように亮は感じている。

床が高い別荘地の家は前庭から玄関まで数段のステップがついていることが多い。

車から降りた晶を玄関からしばらく見下ろしていた比呂美が、にっこりとして声をかけた。

「いらっしゃい。美緒さんによく似ているので驚いたわ。この前会ってから何年ぶりかしら。確か美緒さんの七回忌の時だと思うけど」

「おば様こんにちは。お世話になります」大人びた口を利いて晶は頭をペコッと下げた。

比呂美が用意していた昼食のサンドイッチを食べている間中、晶は何かを考えている様子で殆ど口を利かなかった。

「晶さんはおとなしいのね。お紅茶をもう一杯いかが？」黙々と食べている晶に、比呂美は少し困惑したようだ。

「あ、ごめんなさい。ちょっと考え事してたんです。お紅茶お願いします」

亮は小さめに作られたサンドイッチを二切れ一度に口に入れながら晶を見た。十四歳か、難しい年頃だ。

晶を部屋へ案内した後、亮は裏庭へ出た。芝生が敷き詰めてあるここがブラッキーの遊び場になる。フリスビーを取り出し、空中に投げる。ブラッキーは走りながらジャンプをして口でキャッチする。

「よーし、いいぞ、ブラッキー。もう一度だ」

こうやって夏中ブラッキーと遊べるのも今年が最後になる。来年の三月には大学院を卒業する予定だ。就職したら、学生のと時のように自由ではない。僕が忙しくなったら、誰がブラッキーと遊んでやるんだろうと、亮は時々不安になる。

ニューファンドランド犬のブラッキーは体が大きく、運動は欠かせない。本来はこの別荘の持ち主である祖父の飼い犬なのだが、子犬のときから学校が休みの時は亮が面倒を見ている。亮が忙しい時は訓練士が定期的に運動させているらしい。祖父の岳人は八十五歳になるが、二年ほど前に軽い脳梗塞を起こし、東京の自宅から出ることはなくなった。

「亮さん」と呼ばれて振り向くと、比呂美がテラスに立っていた。

比呂美は犬が好きではない。どちらかと言うと嫌いだと亮は知っている。「ハウス」と命令してブラッキーを犬小屋へと引き上げさせた。犬小屋とは言え、周囲を金網で囲い、動き回れる広いスペースのある小屋だ。ベランダには、鳥の訪れることのないバードフィーダーが半分朽ちて立っている。

「晶さんのことなんだけど」比呂美が言葉を続ける。

「どうかしましたか？」

「晶さんは私をよく思っていないんじゃない？」

「そんなことないでしょう。晶は自分も比呂美さんみたいな優しいお母さんが欲しいと車の中で言ってたし」

「亮さんのお母様と晶さんのお母様は姉妹でしょう？　こだわりがあるかなと思って」

「僕が拘ってないんだから、晶がそんなこと思う訳ない。関係ないと思いますよ」

「それならいいけど……」

「晶が話をあまりしなかったから、気にしてるんですか？」

「ええ、まあそんなとこ」

「そういう年頃なんですよ。僕から見てもあの年代は宇宙人みたいなものだから」

比呂美は安心したように微笑んだ。

ブラッキーはゆっくりと小屋の中から出てくると、比呂美を見あげ「ウー」と軽く唸った。比呂美は眉をしかめると、部屋の中へと戻っていった。

十四歳の夏休み、美緒は二歳違いの兄、亮と並んで、湖へ向かって自転車をこいでいた。亮の荷台には母が好きだったポピーの花束が積んである。アマポーラや虞美人草の名で親しまれているこの花を、母はこよなく愛していたと父から聞いていた。花言葉は慰め、感謝。

昨年、父は、近所の別荘によく来ていた比呂美と再婚した。母の十三回忌を一応の節目としたのだろう。父を非難するつもりはなかったが、全て比呂美の言いなりになる父は、はるか遠くから眺める存在になってしまった。その寂しさは例えようもない。兄の亮さえ、比呂美にすっかり馴染んでいるようだ。比呂美は美しく優しいが、それさえも、美緒には耐えがたく思える。

ひとりぼっちになったと感じた美緒は、頻繁に湖を訪れ、母と対話するようになった。美緒が二歳のときに死んでしまった母を覚えているわけもないが、湖水に手を入れると、母の言葉が伝わってくるように思えるのだ。湖の水が母を記憶していると信じていた。

今日、湖へ亮を誘ったのも、伝えたいことがあったからだ。一人で胸の中にしまっておくには重過ぎる。

亮がポピーの花束をできるだけ遠くへと、力いっぱい湖の中央に向かって投げ入れるのを美緒はじっと見ていた。

「お兄様」美緒は決心して、亮に声をかけた。

「私ね、ここへ来るたびにお母様とお話しているんです。こうやって手を水の中に入ると、お母様を感じることができるの」美緒はしゃがんで両手を水に浸した。

「馬鹿なこと言うなよ」

「本当なの。私には分かるの。信じて。お母様は私に何かを伝えたいみたいなんですもの」

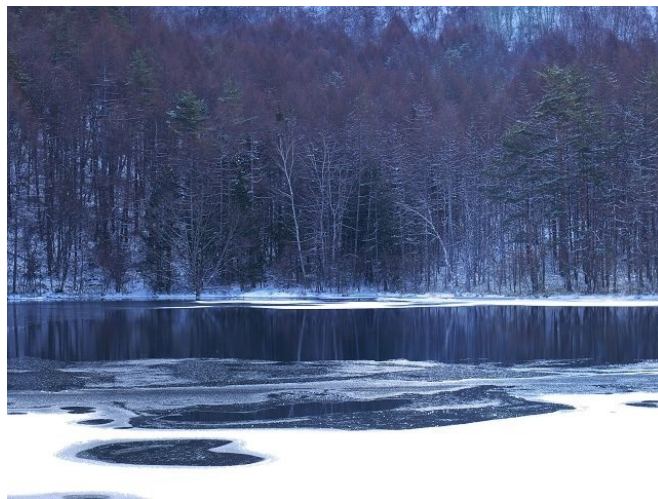
急に亮に抱きしめられて、美緒は言葉を飲み込んだ。

「美緒、帰ろう。きっと疲れているんだ。ゆっくり休んだ方がいい」

兄が自分のことを気遣ってくれているのは良くわかっていた。そして自分の思いが理解されていないことも。

「違うの、違うのよ。疲れてなんかいない」

夏なのに、美緒の心は氷のようだった。そして、湖も真冬の姿を美緒には見せていた。



「亮ちゃん、自転車ある？」

晶に突然聞かれて、亮は戸惑った。

「あるよ。どこか行きたいの？」

「あたし、もう一度湖に行きたい」真剣な顔で晶は亮を見上げた。

亮は晶のスピードにあわせて、ゆっくりとペダルをこいだ。七年前、美緒と並んで湖へ向かったことが思い起こされる。あの時は、ポピーの花束を持っていった。

「さっきの花束は何と言う名の花？」湖に到着すると、亮は自転車を降りながら、晶に聞いた。

「カラーっていう名前。おば様とママが女学生の頃、名前が気に入って好きになったんだって」

「へえ、カラーがそんなにいい名前？」

「英語ではナイルの白百合と言うらしいよ。意外と少女趣味だよね、ふたりとも」晶はクスッと笑い、水辺へと近づいていった。

「美緒ちゃんは、どんな花が好きだったんだろう」

「美緒は花より鳥に興味があったみたいだよ。昨日であったオオルリのような鳥。ふざけて幸せの青い鳥って呼んでたな」

晶は両手を湖水に浸し、目を閉じた。

美緒も同じような仕草をしていた。亮は自分の手を水に入れてみる。冷たいが、ただそれだけだ。十四歳という年齢よりはるかに大人びていた美緒に比べれば、晶からはかない幼い感じを受ける。育った環境の違いによるのかもしれない。



ほんの二、三分ほどの時間だったのだろうが、亮にはかなり長く感じられた。ようやく立ち上がった晶の顔には、困惑の表情が浮かんでいた。

「どうしたんだ？」

「……」晶は無言で亮を見た。

「大丈夫か？ 顔が蒼い」晶の手を取る。長く水に入れておいたためか、氷のように冷たい。

「亮ちゃん、帰ろう」それだけ言うと、晶は自転車に跨った。

別荘に戻ると、頭痛がするといって晶は部屋へこもってしまった。比呂美がノックしても、寝ていれば治ると言って扉をあけようとしなかった。

「亮さん、一体なにがあったの？」

比呂美に問われても、亮には答えようがない。

「湖に行っただけなんですけどね」

「湖？」

「ええ、湖にしばらく手を入れていたかと思ったら、おかしくなって。思春期ってやつかな、女の子は難しい」

比呂美には言わなかったが、あの湖には何かある。そうでなければ、晶が美緒と同じような仕草をするわけがない。いくら思春期とはいえ、あの様子はただ事ではない。亮はブラッキーを連れて、また湖へとって返した。

神秘的で美しい湖。

母が好きだったという湖。

一体、ここで何が起こったのだろう。

ブラッキーのリードをはずし、亮は湖の周囲を歩き出した。見回せば、小さな野の花が夏を精一杯生きている。

ブラッキーはしばらく湖の畔の匂いを嗅いでいたが、湖の中へと足を踏み入れた。

「おいおい、どこへいくんだ」

ニューファンドランド犬は足に水かきがついているほど泳ぎが得意だ。しばらく泳いだ後、岸边に戻ってきたブラッキーは、体をぶるっと震わせて水を体から跳ね飛ばすと、亮の足元に座った。

「ウー。ワン」

「何かわかったのか？ お前が口をきけたらなあ。ウー。ワンじゃ理解できないよ」

シャツの端を啜えて、ブラッキーは亮を引っ張る。そして水辺へと誘導した。晶がしていたように、もう一度亮は手を水に入れた。水は透明で冷たい。一体、この水に何の秘密が隠されているのだろう。

母は亮が四歳のとき、この湖で死んだときかされている。時々ふらっと倒れることがあった母は、この湖の畔で眩暈を起こし、運悪く水の中で意識を失ってしまったのだろうと、中学生の頃父から教えられた。

ほんとにそうだったのだろうか。

母は殺された？ 突然浮かんだ考えに、亮は驚いた。

まさか、誰が何のために？

美緒も殺された？

何故？

振り払おうとしても、一度持ってしまった疑問は心から離れない。母のため、美緒のため、この疑問を解かなければと、亮は決心した。美緒は自分が死なせてしまったようなものだから。

亮が戻ると、晶は居間でクッキーを食べながら比呂美と談笑していた。祖父が元気なときは、白とこげ茶を基調とした、すっきりとした部屋だったが、近頃は比呂美の趣味がそこここに見受けられる。去年はなかった派手なタペストリーが部屋の調和を台無しにしていた。

「頭痛は治った？」少し呆れながら、晶に声をかけた。

「うん、もう大丈夫。クッキー食べたから」

「クッキーで治る頭痛か？」

「そうだよ」晶は屈託がない。

「晶さんから、湖で何があったのか聞いていたのよ」比呂美はにこにこ笑っている。

「そうなんですか」

「おば様に話したらすっきりして、頭痛も治っちゃったってわけ」晶はまたクッキーに手を伸ばした。

「なにがあったんだ？」

「おば様に聞いて。何回も話すの、面倒だもん」

亮は比呂美に顔を向けた。

「あのね、湖水に手を入れると、誰かと話しているような気がしたんですって。それで怖くなったらしいけど、考えれば考えるほど、そんな馬鹿げたことはないと思いはじめて、錯覚だったと気がついたら、頭痛も治ったらしいのよ」

「それだけ？」晶の顔を見る。

「そう。それだけ。おば様のことも聞いちゃった」晶ははしゃいでいる。

「聞いたって、何を？」

「おば様も再婚なんだって。最初の人には嫌な人だったからすぐ離婚して、昔から知っていたおじ様と結婚したんですって」

「そんなことまで晶に話したんですか？」亮は非難がましく比呂美を見た。

「あら、いいじゃない。再婚なんて珍しくないもの。それに亮さんともずっとお知り合いだったじゃない。同じ別荘地にいたのだから」

母が死んだ後しばらくは嘆いていた父も、離婚して実家に戻ってきた比呂美と結婚。屋内で飼っていた犬も、比呂美が嫌がるので外に出したと祖父から聞いている。

室内犬から外犬へ、環境の変化から来るストレスだろうか、犬は一年も経たないうちに死んでしまった。



美緒は心が沈んでいた。頼みの亮は信じてくれそうもない。

亮から事情を聞いた比呂美も心配している。これから、湖に行くことも止められるだろう。

そうだ、朝早く一人で湖に行ってみよう。もう一度母の記憶を辿りたい。

次の日の早朝、美緒は徒歩で湖に向かった。自転車の音で誰かに気づかれては困る。

早朝の湖には、霧がうっすらとかかり、対岸の木々もぼんやりとしている。昇りつつある太陽の光が、徐々に霧を追い払い、湖面がキラキラと輝き始めた。

しばらくその光景を息をつめて眺めていた。美しく、不思議な湖。いつまでもここにいたい。

湖畔に膝をついて手を入れる。母の記憶が手から伝わってくる。母が最後に見たものを、美緒は懸命にすくい上げようとしていた。なにが起こったの、お母様。教えて。美緒に教えて。

やがて母の見たものが手を伝わってきた。思いがけない真実が美緒に衝撃を与えた。

ほんとなの？ と思った瞬間、頭に衝撃を受け、美緒は湖に倒れた。

あお向けにされ、首を押さえられて水の中に浸された美緒の目は、はっきりと襲撃者の顔を捉えていた。

* * * * *

美緒の言葉を信じてやればよかったと、亮は今でも後悔している。そうすれば美緒が一人で湖に行くことはなかったはずだ。自分が殺したようなものだ。何故、湖の傍で水死していたのか、結局わからなかった。警察は事故と判断した。「思春期の頃は、脳貧血をおこしてぼったり倒れることがあるんですよ。学校の朝礼でも、よくあることです。場所が悪かったんですな。後頭部の傷は倒れたときに石にあたったのでしょう」

母の次に娘も？ との思いが残ったが、結局家族もそれを受け入れた。二人の不幸を経験した祖父は、別荘を手放そうとしたが、創と亮とが反対をした。創は「二人が死んだ傍にいつもいてやりたい」と祖父に訴えた。

あれから十二年。疑問は徐々に消えて行った。

美緒の七回忌が済んだ後、祖父の岳人は犬を飼った。ブラッキーだ。治安が以前より悪くなったと判断したのだろう。番犬として最適だと考えたのだ。特に、比呂美が一人で滞在する場合を心配したのだと思うが、肝心の比呂美は犬が嫌いだ。しかし、ここは祖父の別荘なのだから逆らうことはできない。結局世話は亮がすることになった。

犬は本能で犬嫌いを察知する。ブラッキーは決して比呂美になつこうとしなかった。

深夜、そろそろ亮も寝ようかと電気を消そうとしたとき、そっとノックする音が聞こえた。亮は不審に思いながらも静かにドアを開けた。

「晶！」

「シー」晶は人差し指を口に当てた。

「どうしたんだい、こんな時間に」

「話したいことがあるの」

「あきれたね」首を振りながらも、晶を招じ入れた。

「僕は従兄弟だけど男だよ。夜中に男の部屋に入ってくるものじゃない」

「いいじゃない、そんなこと。それより聞いてもらいたいことがあるんだ」

晶は部屋にある椅子に勝手に座ると話し始めた。

「比呂美おば様には笑われそうで、詳しく話さなかったんだけど、あの湖の水は不思議な力を持ってるんだ。亮ちゃんは信じないかもしれないね。でも、ほんとなんだよ」

「どういう風に不思議なんだ？」

「湖に手をいれると、人の記憶が伝わってくるような気がする。声が聞こえるんじゃないよ。体に染み込んで来るといふか」

「テレパスみたいなもんかな」

「うん。そうだね。それが、曜子おば様か美緒ちゃんの記憶みたいなんだ」

「母と美緒……」

「はっきりしていないんだけど、しきりに伝わって来るんだ。きっと何があったか知らせたいんだと思う。だから又湖に行きたいの」

「やめておけ」亮は即座に言った。「危険だ」

美緒はびっくりしたように亮を見た。「危険？ なんで？」

「そんな気がするんだ。僕が調べてみるから、美緒はもう首を突っ込むな」

「だって、亮ちゃんは水の声が聞こえないんでしょう？ 無理だよ」



亮は黙った。確かにそうだ。理由は分からないが、美緒と晶にだけ伝わるらしい。
「じゃ、約束してくれ。湖には必ず僕と一緒にいくこと。ひとりで行動しては絶対だめだぞ」
「うん、わかった。あとで思い出したことを紙に書いておくね」そう言い残して、晶はするりと部屋を出て行った。

もし、母と美緒が殺されたとして、犯人は通り魔か？ 母が死んだのは二十二年前、美緒は十二年前。通り魔がその間うろろしているとも思えない。

通り魔でなければ知り合いと言うことになる。母と美緒の両方に恨みを持つ者がいるとはおもえない。美緒が殺された理由は、真相を知ったためと考えれば筋が通る。

「ほんとうなの。私にはわかるの」と訴えていた声が耳に残っている。

考えれば考えるほど、犯人は見えてこない。祖父か父が……まさか、背中に戦慄が走った。そんなことはあるはずがない。あつて欲しくない。比呂美はどうだろう。しかし、母が死んだ時、比呂美はまだ家族ではなかった。同じ別荘地に住んでいるという点以外、共通項はない。その後比呂美は結婚しているし、母を殺す理由は何もない。考えは堂々巡りを始めた。

死んだ時、十四歳だった美緒。晶も十四だ。十四と言う年齢が何か関係あるのか。ベッドに転がって考えているうちに眠ってしまったらしい。

窓辺でオオルリのさえずりが聞こえる。亮は目を開けた。家の傍までオオルリが来るなんて珍しいことだ。ベッドサイドの時計を見る。午前五時を回ったところだ。起き上がって窓の外を見ると、空も白み始めている。

黒く大きな犬が家の前の通りを全速力で走っていくのが見えた。「ブラッキー？」

庭で放し飼いにしている、利口なブラッキーは家の外に出たことはない。胸騒ぎがして慌てて着替えると、晶の部屋を覗いた。ベッドはからだった。

「あいつ……」

慌てて車のエンジンを掛ける。焦っている時は、何でもないことにも手間取る。エンジンは何回か空回りした。

湖の横にある道路に車を止め、上から湖畔を眺める。オオルリのさえずりが激しい。いぶかしく思って新しく出来た東屋に目を移すと、人影が見えた。

晶か、いやもうひとりいる。手に光るものをが見える。亮は慌てて湖へと駆け下りた。東屋から晶が湖へ落ちるのがスローモーション映画のように目に映った。

「晶！」

その時、黒い大きな塊が東屋に残った一人に飛び掛った。光るものは弧を描いて湖に落下した。鋭い悲鳴が聞こえ、人が床に転がるのが見えた。次に黒い塊は水の中に飛び込んだ。激しい水しぶきがあがる。

「ブラッキー」

東屋へ急ぐ。うずくまって呻いていたのは比呂美だった。足と腕に歯型がくっきりと残り、血も滲んでいる。肉も少し食いちぎらたのか、飛び散った血が東屋を汚していた。

「比呂美さん」呆然と比呂美の顔を見つめた。

憎悪の眼差しが亮に向けられた。

やがてブラッキーが晶の襟を加えて、湖畔まで泳ぎついた。晶は多少水を飲んでいられるらしい。亮は胸を押して水を吐かせた。携帯で救急車と警察を呼ぶ。それから静かな湖畔は、喧騒に包まれることになった。

病院から帰宅を許された晶を乗せて、亮は別荘へと向かった。亮の父と、晶の父母が待っているはずだ。

「全く無茶するんだから。あれだけ単独行動はするなと言ったのに」

「ごめんなさい」晶は珍しくしおらしい。

「部屋へ帰ってから、色々と思い出したことを書いていたら、気になったことがあってどうしても確かめたかったんだ」

「書いていたこと？ そんなもの部屋に見当たらなかったと思う」亮は首を傾げた。

「テーブルの上に置いたよ。後で亮ちゃんが見るかと思って」

「比呂美さんが見たんじゃないかなあ、それ。で、慌てて晶の後を追いかけた」

「おば様が犯人だったなんて、信じられない」晶の目が潤んできた。

「僕だって信じられないよ。何故母を殺さなくてはならなかったか。僕はどうしても知りたい」

「ブラッキーは？ どこにいるの？」

「心配しなくても家で待ってる。人間に噛み付いた犬は処分されるのが普通だが、今回は事情が事情だから」

「当たり前だよ。あたしを助けてくれたブラッキーを処分するなんて、絶対許さない」

山々が紅葉で彩られる頃、連休を利用して亮は晶を湖へ連れていった。亮の父、創は心痛で体調を崩し入院中だ。ブラッキーは亮と一緒に、別荘と東京の家とを行き来している。亮のそばを離れることはない。

事件にはなるべく触れないようにと言うカウンセラーの忠告に従って、詳しい事情はまだ晶から聞いていない。

比呂美が母を殺した理由も、亮には納得できなかった。

「曜子が倒れるのをみて、いいチャンスだから殺してやりたいと思った。幸せそうな曜子を見ているといらいらする」と供述しているという。たったそれだけの理由でと亮は怒りを覚えた。いずれにしろ時効が成立しているので、裁かれるのは晶の事件が主になるだろう。美緒の事件は立件が難しいそうだ。弁護士は心神耗弱を主張している。この湖へ来ることも躊躇したのだが、晶の強い希望でやってきた。以前のように晶は湖の畔に跪き、手を水に入れた。

「亮ちゃん……」

「どうした？ また何かあったか？」

「ううん。あたし何も感じなくなっちゃったみたい。水は綺麗で冷たいだけ」

亮はふと思いついて晶に尋ねた。

「晶の誕生日はいつだった？」

「八月三十日に十五歳になったよ」

「そうか、きっとそのせいだな。水の記憶を掬い取れるのは十四歳までなんだよ」

「何で分かるのさ」晶は口を尖らした。

「美緒が十四歳だったから。十四歳の美緒が同じ年になった従妹の晶に伝えたかったんじゃないかな」

「あたしは違うと思う。犯人が捕まったからだよ」

「うーん、そうかもしれない。どっちにしても晶が普通になってよかった。お前もそうおもうだろう？」

ブラッキーは亮を見上げ、尻尾を振った。

-fin-

